

# 平天仙姑小考

—— 黒河中流域における水神信仰の過去と現在 ——

井上 充幸

## 1. はじめに

筆者はかつて、総合地球環境学研究所（RIEN、略称：地球研）の「水資源変動負荷に対するオアシス地域の適応力評価とその歴史的変遷」（略称：オアシスプロジェクト、二〇〇二・七）に参加した。この文理融合型のプロジェクトでは、青海・甘粛・内蒙古を貫流する黒河流域を調査対象地域に設定し、国内外の研究者・研究機関と共同でデータ収集とその解析を行い、そうして得られた研究成果を総合して、中国西北の乾燥～半乾燥地域における自然と人との相互作用の歴史の解明を目指した<sup>①</sup>。筆者自身も二〇〇三年と二〇〇六年に現地調査を行い、関西大学文化交渉学教育研究拠点（ICIS）へ移籍した後も、二〇一〇年に現地調査を行った【図1】。

筆者は主に歴史文献の記述を柱として、現地調査で得た情報や他分野の研究成果（考古学・人類学・地理学・雪氷学・水文学・地質学・気象学等）も加味しつつ、中国近世の黒河流域における水資源の利用に関する研究を進めてきた「井



【图 1】黑河流域地图（筆者作成）

上充幸二〇〇七A・B、二〇一一」が、その過程で、黒河中流域のオアシス地域を中心に、古くから信仰を集めていた様々な水神の存在に気付き、これに着目するに至った。

本稿では、現地固有の水神である「平天仙姑」を採りあげ、過去から現在に至るまでの仙姑に対する信仰の起源と変遷について、黒河の水資源をめぐる人々の生活との関わりを交えつつ考察を加える。その解明に当たっては、文献資料と並んで、黒河中流域の各地に現存する水神信仰にまつわる石碑の存在が重要な役割を果たしているため、それらを中心に据えて論を進めていくこととする。

これらの石碑については、二〇〇六年の現地調査に同行していただいた井黒忍氏によってその概略がまとめられており一井黒忍二〇〇七一、本稿も氏の記述に負うところが大きい。陝西・山西を中心に、多年にわたる水利碑の現地調査を行い、数々の優れた成果を挙げてこられた井黒氏は、公開性・実用性・現地密着性という特性を持つ水利碑の利用にあたって、「これまで主流であった同時代の典籍資料の隙間を埋める「横」の利用から、碑刻群の総合的な調査・利用を通して、同一地域における時代を異にする碑刻を「縦」に並べて地域史を通観するという視点」の必要性を指摘しておられる一井黒忍二〇一二。本稿は、平天仙姑信仰を手掛かりに、黒河中流域における歴史を縦に通観しようとする、筆者なりの拙い試みでもあるといえよう。

## 2. 平天仙姑の物語 — 前漢時代



【図 2】『勅封平天仙姑宝巻』巻頭口絵

『民間宝巻』第 13 冊

（『中国宗教歴史文献集成』113、黄山書社、2005 年）より

甘肅省張掖市の西に隣接する臨沢県に、板橋という町がある。板橋は、張掖の扇状地を流れ下った黒河の本流と東の山丹河が合流して、川幅が大きく広がり流れも緩やかになる場所に位置する。ここは、かつては黒河中流域において最も水量の豊富な場所であり、同時に重要な渡河地点でもある。黒河右岸に面する板橋の北には、甘肅省と内蒙古自治区の境界を成す合黎山

が聳え、その麓に平天仙姑を祀る仙姑廟が建てられた。

仙姑廟は、一七世紀初頭までは、長城線の外側にある合黎山の山上に建てられていたが、明の天啓三年（一六三三）、平川堡守備の徐承業により現在地に移された（後述）。これは、北方からの遊牧勢力の圧力が強まったための措置である。以後、仙姑廟は興廃を繰り返しつつ二〇世紀まで存続し、一九一九年には大規模な修築が行われたが、

一九五八年に破壊されてしまった「周国瑞二〇〇五A・B」。そして一九九九年、仙姑廟の跡地には「香古寺」という名の仏教寺院が建設されたが、境内の一角には「仙姑殿」も置かれ、仙姑は再びここで祀られるようになった。平天仙姑の事績については、後述する清の康熙三十七年（二六九八）刊の『勅封平天仙姑宝卷』<sup>③</sup>に最も詳しく述べられているので、次にその目録と、ストーリーの概略を紹介しよう。なお、（ ）内は宝卷の説唱の際に唄われる小曲の名称である【図2】。

巻頭…「擧香贊」・「開經偈」・「開經贊」・「仙姑寶話」

仙姑修行分第一（上小樓）

仙姑修橋分第二（浪淘沙）

驪山老母度仙姑分第三（金字經）

仙姑煉魔分第四（黃鸞兒）

仙姑得道升仙分第五（駐飛雲）

仙姑顯骨分第六（浪淘沙）

仙姑設橋渡漢兵分第七（傍妝台・哭五更）

彝人焚廟分第八（清江引）

仙姑一殃彝人分第九（羅江怨）

仙姑二殃彝人分第十（皂羅袍）

仙姑三殃彝人分第十一（耍孩兒）

彝人修廟分第十二（一剪梅）

仙姑救周秀才分第十三（鎖南枝）

仙姑將逆婦變狗分第十四（綿塔絮）

仙姑救王志仁分第十五（畫眉序）

仙姑救單氏母子分第十六（駐馬聽・哭五更）

玉帝降敕與仙姑分第十七（謁金門）

八洞神仙慶仙姑分第十八（一江風）

仙姑近代顯靈分第十九

卷末…「回向無上佛菩提」

前漢時代の昭武県（現在の臨沢県）に一人の娘がいた。合黎山で修行を積んだ彼女は、土地の人々のために黒河に橋を架けることを思い立ち、長年の苦勞の末、完成直前までこぎつけた。ところが黒河の水が突如として氾濫し、娘もろとも橋を押し流してしまった。土地の人々は彼女の功徳を思い、娘の遺体が流れ着いた場所に廟を建て、「仙姑」と呼んで彼女を祀った。そしてこの出来事が板橋という地名の由来となった。ちなみに、仙姑の遺体からは妙なる芳香が発せられていたとも伝えられており、これが現在の「香古寺」の由来ともなっている（以上、『勅封平天仙姑宝卷』第一・第六）。

前漢の武帝の元狩年間（前一二三・一七）、驃騎將軍の霍去病の率いる軍勢が、匈奴の渾邪王の軍勢に追撃されて撤退中、黒河の流れに退路を遮られてしまった。すると突然、河の上に緋色の衣をまとった仙姑が現れ、たちまち

のうちに橋を架けたため、漢の軍勢は速やかに渡河することができた。そしてその後、追撃してきた渾邪王の軍勢が橋を渡り始めると、突如として橋は消滅し、匈奴の騎兵は皆おぼれ死んでしまった。これに怒った渾邪王は、仙姑廟に焼き打ちをかけたところ、匈奴の人々に疫病や天変地異が次々と降りかかったため、祟りを畏れた渾邪王の息子は、財宝を差し出して仙姑廟の再建を願い出た。この功績により、前漢の武帝は勅命により仙姑を「平天仙姑」に封じた。そして、匈奴の人々は仙姑の威霊を畏れ、廟の前を通り過ぎる際には廟を正視せず、手を額にかざして敬ったという。かくして仙姑は、「外夷」の脅威を打ち払う土着の守り神として、黒河中流域に暮らす人々の尊崇を受けることとなった（以上、同書第七・第一二）。

またこの他にも、虐げられた貧しい人々を救い、女性に子供を授けるなど、様々なエピソードが語られる（同書第一三・一八）<sup>④</sup>。

果たして仙姑は、漢代に実在した女性だったのか、あるいは方步和氏が推測しておられるように、東晋より後の時代の人なのか一方步和一九九二、あるいはそもそも実在した人物であったのか、については、これを裏付ける史料が存在しない以上、結論づけることはできない。また、以上に紹介した物語についても、これをそのまま「史実」を直接反映したものと考えることも困難である。しかしながら、絶えざる遊牧勢力の侵攻にさらされていた黒河中流域に暮らす人々、とりわけ農耕にいそしむ人々にとって、仙姑は彼らの切実な願望を担う存在として、彼の信仰の中で生き続けたのであり、この点がなにより重要であると考えられる。

以上を確認した上で、次にこの仙姑説話の成り立ちについて、順を追って検討していきたい。

## 3. 《黒水橋碑》との関連について―西夏時代

この仙姑以外にも、黒河流域では、古来様々な水の神々が祀られていた。その代表格が龍王である。黒河中流域における龍王信仰の歴史は古く、張掖では西夏の乾祐七年（一一七六）<sup>5)</sup>に、上・中・下の三箇所龍王廟が建設されたと伝えられる。それらはいずれも黒河の治水の最重要地点に置かれ、歴代王朝による庇護のもとに祭祀が行われた。この他、黒河流域の至る所に大小様々な龍王廟、あるいは龍王堂などが分布しているが、それらもやはり、灌漑用水の分水地点や、山麓からの流出口など、河川管理のポイントに設置された「井上二〇一一」。

上龍王廟（旧名「河流神廟」）は、祁連山脈から張掖の扇状地に黒河の本流が流れたす鷺落峽に建設され、「龍首潭」と呼ばれる水源の守護神として龍王が祀られた。明の天順元年（一四五七）に重修された後、嘉靖年間（一五二二・六六）に、時の甘肅巡撫の楊博によつて重建され、続く清の乾隆二四年（一七五九）には、乾隆『甘州府志』（乾隆四四年（一七七九）序刊本）巻頭の「上龍王廟図」に見る通り、張掖知県の王廷賛によつて山門・寢殿・廊房などが増築され、『甘民衣食源』の匾額が奉納された<sup>6)</sup>。二〇世紀に入り、民国期における戦乱と文化大革命によつて、上龍王廟はその大部分が破壊され、現在は小さな建物を一つ残すのみとなり、一人の道士によつて管理されている。二〇〇五年の調査では、敷地内には雍正元年（一七二三）の石碑などが残存していた<sup>7)</sup>。なお張掖地区では、黒河本流の水源に位置する上龍王廟は、最も格式の高い「本宮（総龍王廟・都龍王廟）」に位置づけられており、その他の場所に置かれた龍王廟・龍王堂は、出張所である「行宮」に相当する「井上二〇一一」。

中龍王廟は、鷺落峽と張掖市街のちょうど中間、小溝という村落の近くに位置し、灌漑用水の分水地点に建立さ



交通の要衝を守る位置にあった。こちらも中龍王廟と同じく元の末期に焼失し、明の洪武年間に再建、清の康熙四〇年（二七〇二）に、地元の住民が重修した。明の嘉靖二五年（一五四六）には、楊博が「祈雪文」を、同二七年（一五四八）には、やはり楊博が「祈雨文」を、それぞれ捧げるなど、重要な祭祀の場であったことがうかがえる。現在、下龍



【写真1】《黒水橋碑》

大仏寺（張掖市博物館）にて筆者撮影（2003年）

れた。元の末期に焼失し、明の洪武年間（一三六八・九八）に再建、嘉靖年間に補修を受けた後、清の康熙八年（一六六九）、甘肅平定に活躍した靖逆侯の張勇が改修した<sup>⑧</sup>。現在は地名が残るのみで、建築物や遺構は現存せず、存在した場所についても詳細は不明である。

下龍王廟は、張掖市街の西五キロメートルほどの地点に建設された。ここは昔も今も、最も主要な黒河の渡河地点であり、西夏支配期の一二世紀中盤には橋がかけられ、東西

王廟の建築は失われ、かつての甘新公路であった国道三二二号線と、黒河とが交差する地点に、その名を残すのみとなっている。

この下龍王廟には、ある重要な石碑が置かれた。それが《黒水橋碑》である【写真1】。《黒水橋碑》については、佐藤貴保氏らにより、原拓に基づいた決定版ともいべき詳細な研究がなされており、以下の記述はこれに拠る。「佐藤貴保ほか二〇〇七・王堯一九八四」。この石碑は、上・中・下龍王廟と同じく、西夏の乾祐七年（一一七六）に、仁宗李仁孝の勅命により建立されたものである。碑文は漢文とチベット文により表記され、それぞれ西夏語の原文から翻訳されたものと推定されている。《黒水橋碑》は、中華民国時代に張掖城内の清源妙道真君を祀る廟に移され、現在は大仏寺にある張掖市博物館内に陳列されている。<sup>⑩</sup>その内容は、乾祐二年（一一七二）、張掖（当時は鎮夷郡）に行幸した仁宗李仁孝が、黒河に架けられた橋を訪れ、山神・水神・龍神・土地神など、八百万の神々に対して、橋の安全と水害の防止を命じたものである。

そしてこの橋を架けた人物こそ、「賢覺聖光菩薩」である。彼は、乾祐年間に仁宗李仁孝の帝師となつた、賢覺帝師波羅顛勝と同一人物であるという説もあり「沈衛榮二〇〇七」、碑文の中では黒河の龍神を鎮める靈力の持ち主となっている。やがて時代が下るにつれて、この賢覺聖光菩薩と仙姑とは、次第に同一視されるようになっていった。清の乾隆『甘州府志』巻一一「人物」仙積「張掖泉」の条には、「賢覺聖光菩薩とは、黒河に橋が架かることを願つて入水した漢代の仙姑なる人物のことで、西夏の皇帝が彼女に賢覺聖光菩薩の称号を授与した」と記される。この説話については出典が明記されておらず、おそらく乾隆『甘州府志』編纂当時（一八世紀後半）の伝承に基づいたものであると考えられる。そして、これ以降に記された史料の中において、仙姑はしばしば「仙姑菩薩」とも呼ばれている。

二〇〇六年に香古寺の中にある仙姑殿を訪問した際、ここには明の万曆六年（二五七八）建立の《重修仙姑廟記》（後述）と並んで、《黒水橋碑》のレプリカ（二〇〇二年立石）が置かれていた。このことから、今に至るまで、両者が同一の存在と認識されてきたことは明らかである。乾隆『甘州府志』巻四「名勝」には、これも時代は不明ながら、賢覚聖光菩薩が板橋において橋を架けたというエピソードが記されている。また、明の嘉靖二五年（二五四六）成立の嘉靖『陝西通志』以降、現存する地方志には、《黒水橋碑》の存在が必ず記されており、遅くとも一六世紀には、黒河中流域において賢覚聖光菩薩に対する信仰が定着していたことが推測される。

仙姑と同じく、賢覚聖光菩薩も漢代の人なのか、西夏時代の人物なのか、あるいは架空の存在なのか、現時点では結論を出すための十分な史料はない。しかしながら、やはり重要なことは、仙姑の持つ「橋を架けて衆生を救う」という属性が、《黒水橋碑》に記された賢覚聖光菩薩の事跡に由来するものであり、西夏から清に至る長い間に、両者が次第に習合して一つになっていった、ということである。仙姑説話成立のプロセスにおいて、西夏時代は重要な画期となった時代であるといえよう。

#### 4. 仙姑説話のテキストへの定着 — 明清時代

『勅封平天仙姑宝卷』第一九「仙姑近代顯靈分」には、「仙姑の靈驗譚が決して荒唐無稽の話ではないことを衆生に伝えるため」として、明の弘治年間（二四八八・二五〇五）から崇禎九年（二六三六）までの、「近代」の仙姑の事績

が列挙される。その多くは「北辺の達子」の侵入と仙姑廟への焼き打ち、それに対する仙姑の靈力による撃退と廟の再建に関わるもので、宝巻前半にある匈奴と仙姑の話と同工異曲である。

当時、黒河中流域は四方からの攻勢にさらされており、一五世紀末からは、主にタタルやトゥルファンなど西北の諸勢力が、一六世紀後半からは、主に青海（海夷）やオルドス（套虜）など南東の諸勢力が、しばしば黒河中流域に侵入した。明朝の側は、当初は長城線の強化・新規屯田開発・兵員の増強・火器の配備など、専守防衛に努めたが、隆慶和議成立（二五七二）以降は、交易場（互市）を開くことでこの事態に対処しようとした。

「仙姑近代顕靈分」の冒頭には、弘治年間に「北辺の達虜」が内地を侵犯し、「娘娘廟」、すなわち仙姑廟を焼き打ちしたとあるが、地方志には、弘治元年（二四八八）に「小王子」が山丹に侵入、同一年（二四九八）五月には、肅州參將の楊翥が黒山にて「小王子」を撃破、同一八年（二五〇五）にも「小王子」が甘肅一帯に侵攻、などの記事が見え、ダヤンハーンの勢力拡大と連動していることをうかがわせる。

次いで、「仙姑近代顕靈分」は、嘉靖四三年（二五六四）の「達子」の侵入を記すが、この時期には、同三六年（二五五七）に、トゥメト部長のアルタン（俺答、Altan）が甘州を一日間包囲、翌年八月にはオルドス部長のメルゲンの息子「吉囊」（フヤンダラ晋王、Noyandara Jinong）も甘州を包囲するなど、モンゴル右翼部の活動が活発化していた時期に重なる。また、『勅封平天仙姑宝巻』に登場する匈奴の頭目に対し、「綽什噶（Cosiga）」・「丹進台吉（Danjin Tavji）」・「ト什兔（Busitu > Boshitu）」など、いかにもモンゴル風なネーミングがなされている点も注目される。このうちト什兔の名は、万曆一八年（二五九〇）に都督同知の張臣が撃破した青海モンゴルの頭目のものと同一である<sup>④</sup>。この年、トゥメト万戸の火落赤（Korci）が、青海の捏工川において建造中のチベット寺院を、陝西総督の梅友松によって焼き打ちされたため、その報復として、オルドス・青海の諸勢力を糾合して、河州・洮州をはじめとする甘南各地に

加護を得て甘州城を守り抜いたという。「擦秀家」とは、おそらく先の「裨什噶 (Cosga)」のモデルとなった人物と思われる以外、詳しいことは不明だが、チャハル部長のリグダンに続いて青海に侵入した、ハルハ左翼部のチョクト II ホンタイジ (緯克凶洪台吉、Choju Gong Taiji) の活動に関連する出来事を踏まえたものである。「張総兵」については、崇禎八年 (一六三五) に総兵官となった、涼州出身の張顕謨の名が地方志に見える。この人物は柳州での戦闘で戦死し、その功績を表彰されたが、あるいは「張総兵」の説話になんらかの関係があるのかもしれない。この時期に繰り返し焼き打ちに遭った仙姑廟の修復について、「仙姑近代顕霊分」は、嘉靖一七年 (一五三八) に巡撫の楊博が私財を投じて再建したことを記すが、史書やその他の文献資料は、巡撫の侯東萊が、万曆五年 (一五七七)



【写真2】《重修仙姑廟記》

板橋喬古寺の仙姑殿にて筆者撮影 (2006年)

大攻勢をかけていた。ト什兔はこれに合流しようと、臙脂山南麓から永昌へ抜けるルートを進んでいた際に、張臣に要撃されたのである。この戦役は、兵部尚書の鄭洛の活躍によって鎮圧され、オルドスと青海との結びつきは一旦分断されるに至った。<sup>⑤</sup>

なお、「仙姑近代顕霊分」によれば、崇禎七年 (一六三四)、青海を併呑しようとする目論む「擦秀家韃子」と戦って敗死した「張総兵」の霊が、仙姑の

に仙姑廟を重修したことを記しており、これが仙姑廟と官との関わりを確認できる最初の事例である。

侯東萊は、字は儒宗・道宗、号は掖川、山東の掖縣の人である。嘉靖二十九年（二五五〇）に進士となり、嘉興知府・河南按察使・陝西布政使などを歴任し、万曆二年（二五七四）に甘肅巡撫に着任した<sup>⑧</sup>。侯東萊の赴任当時、アルタンの第四子のビンドウ（賚兔・丙兔、Baidu）は、青海に駐牧して河西への侵入を繰り返して、明朝に対して互市を開設するよう要求していた<sup>⑨</sup>。これに対し、兵部は反対を表明し、要求を拒絶するよう主張したが、侯東萊は張居正からの支持を取りつけてこれを受け入れ、甘州に大市を、莊浪に小市を開設してビンドウを慰撫した<sup>⑩</sup>。一方で、河西各地の都市の城壁を磚で葺き、青海からの進入路のうち最も重要な扁都口（現在の張掖市南東の民樂県と青海省祁連山との境）の防備を固めるなど、陝西総督の石茂華と共に、陝西・甘肅方面における統治の安定に尽力した<sup>⑪</sup>。

先にも述べたとおり、『重修仙姑廟記』は、仙姑の事績を記した史料の中では、現存する最古のもの（二五七八年）であり、幸いにも一九五八年における破壊を免れ、現在は板橋の香古寺の仙姑殿に安置されている【写真2】。二〇〇六年の調査で確認したところ、石碑の高さは約一メートル、幅は約六〇センチメートル、厚さは約一〇センチメートル、碑頭の部分は失われており、やや風化の進んだ砂岩質の石材の碑陽には漢文が陰刻（全二行）され、周囲には雲雷文が施されており、「張掖地区重要碑刻一覽表」所載のデータに一致するものであった<sup>⑫</sup>。

碑文の内容については、『臨沢県採訪録』『金石類』、および『臨沢県志』（甘肅人民出版社、二〇〇一年）「文化編」第三章「文芸」散文に所収の録文とおおむね同じ（ただし、本文末尾の一行、十数文字分を録さず）であり、文字の異同と改行位置の確認にとどめた。なお、立石者の名を列挙した部分の下部に、さらに一〇文字ほどが刻まれ、碑陰にも文字らしきものがうかがえたが、光量の乏しい室内でのガラスケース越しの観察となったため、詳しい解説は困難であった。

以上を踏まえた上で、『臨沢県採訪録』『金石類』所収の録文により、その内容を示すこととしたい。なお、句読点などは筆者が加えたものであり、「\」は改行位置を示す。

《重修仙姑廟記》

夫鬼神之在天地則極其衆、其有設廟以敬祀者、蓋由生而有功于人、歿而顯靈于世、禦災捍患、報國、救民而已。甘鎮北堡名曰板橋、境外廟曰仙姑。究所從來、自漢大將軍霍去病和戎之繼、百姓始得耕、耨。見一女身「体」軒昂、窈然有不凡之像。因黑河之源水溢、非舟可渡、于是設橋以濟人。斯民不患徒、涉、而河西北亦且便耕、行稱便利、而姑之功不在禹下。

但時遠水發而橋崩廢、姑亦隨水而逝、踪迹則不昧。或顯身于晝夜、或行施以風雨。民感其靈、尋尸而葬、故立廟以祀、而廟之設由此始焉。是以民、聞風波旱潦、祈福禳災者、隨禱即應、不啻影響。然時則鍾鼓自鳴、空中恒有管籥之音。一日風雨大作、折木揚沙、斯廟前現一鐵牌、上書「平天仙姑」、而仙姑之名、由此稱焉。是以萬古靈威、千載感應。

時有北、虜犯邊、見其像毀之、其人即斃。虜怒以火焚之、其九人自死于火中。自此北虜至廟者、不敢正視、但手加額、敬畏不暇。

萬曆丁丑、恭逢撫臺大司馬侯公敬神之心、遂擇委平川、守備王經、命匠宏廠、添築墻垣、續蓋享堂三間、廂房四間、大門一座、彩繪侍衛、栽植樹木、森然弱水、合黎之勝境。自此香火日繁、人益敬信。民感公德、盡善盡美、紀錄始末功業、勒諸金石、以垂不朽、以下十數字一

〔崑〕

萬曆六年歲次戊寅三月上吉日

欽差巡撫甘肅等處地方質理軍務兵部右侍郎兼都察院右僉都御史侯

欽差平羌將軍鎮守甘肅等處地方總兵官前軍都督府僉事陳<sup>②</sup>欽差督理馬政總督河西屯田甘肅行太僕侍卿兼陝西按察使僉事馬<sup>③</sup>欽差督理甘肅糧儲屯種水利陝西按察使分巡西寧道副使殷<sup>④</sup>

欽差甘肅巡撫「標下」游擊將軍楊「以下約二文字」全立石「以下約九文字」

以上のように、その文面には、仙姑による架橋と匈奴撃退のエピソードという、『勅封平天仙姑宝卷』の記述における、二つの重要な骨子がほぼ網羅されており、この石碑が建立された時点で、仙姑説話の原型が出来上がっていたことを物語る<sup>⑤</sup>。なお車錫倫氏は、明代後期から清代前期にかけて流行した「無為教」の影響を指摘された上で、やはり仙姑説話の成立年代をこの頃と推測しておられる「車錫倫一九九七」。

そして先に述べたとおり、天啓三年（一六二三）、それまで長城線の外にあった仙姑廟が現在地に移されることとなった。新たな仙姑廟の竣工にあたり、事業の経緯を記した石碑、『重修平天仙姑廟記』が建立され、民国時代まで残されていたが、現在その実物は失われてしまっている。以下、先に同じく『臨沢県採訪録』『金石類』所収の録文を示す。句読点・改行等は筆者が加えたものである。

《重修平天仙姑廟記》



蓋聞、明禋肖像、崇祀報功、亘古今率土濱之所不廢。然未有如平天仙姑、河北一綫殊方、無貴無賤、無遐無邇、肩爾往、肩爾來、咸竭誠奉祀、朝夕頂禮若弗違者。

蓋謂、仙姑、自漢以來明禋惟謹、呵護屢彰、軍民以安、封疆鞏固、保釐嗣息、無地無處無不沐其感格。第廟貌寢至頽圯、規模卑隘者多矣。茲惟徐公諱承業者、守戎于此、莅事而展謁宇下、訝之曰、「奉祀不虔、神不之格、神之不格、何以奠要荒而保土庶。」父老僉謂香資已竭、募化惟艱、公遂捐俸金、舉功德、主張東吾募化、王柏飾材鳩工、創建正殿抱厦三間、重建土地山神二祠、碑坊・石碣之類、悉命兵卒而土木工緊、遂不月告成焉。輪奐既飭、而俎豆時張、赫赫洋洋、英靈如在、足稱一方之勝境矣。

徐公之意、若曰韎韐之士、日周旋于戎馬之場、保疆禦虜、惟乃之職、非忠非勇、何以報國。而香火供奉、獨隆于斯神、必有作其勇敢之氣于居常者矣、必有奮其捐軀之心于敵愾者矣。爰磨貞珉、丐生記。何足矣以文、稔知徐公忠義士也、其心不能一日忘報主、亦不能一日不懷民。是以仰契神明、而眷切于衆庶之奉祀也如此。以故知徐公所見者明且遠、而所望者寬且大焉。因叙其由、并歲月記之。

天啓三年歲次癸亥七月吉旦

天城庠廩盛思温沐手謹志

欽差甘肅游擊將軍陳洪范

陝西行都司儒學生員陳昌言・戴振先等同立石

徐承業は、平川堡守備から固原遊撃となった人物（『明熹宗實録』卷三四・天啓三年五月戊申条）であること以外、詳細は不明である。撰者の盛思温は天城（現在の高台县北部）出身の「庠廩」、すなわち高台县学の生員で、天啓五年

(二六二五)に歳貢生となつた盛思讓は、おそらくその族人であろう(『重修肅州新志』高台县第六冊「選舉」)。その他、立石に関わつた陳洪范・陳昌言・戴振先の三名については不詳である。

乾隆『甘州府志』巻頭の「撫彝(現在の臨沢)全図」に記される通り、新旧二つの仙姑廟は、長城を挟んでごく近い場所にあつた(旧仙姑廟の跡地の具体的な場所や現状については不詳)。地元の人々によれば、かつて仙姑廟があつた地点は、仙姑の遺骸が葬られた場所であり、長城の上からも見える場所にあつたが、参詣に不便なため現在地に移した、とある<sup>⑧</sup>。これは、北方からの遊牧勢力の圧力が強まったための措置であつた。

以上、仙姑説話が現在伝わる形に整えられたのは、一六世紀頃であつた可能性が高いと考えられよう。そしてそこには、仙姑の祭祀に対して、官の側からの公認と保護とを得られたことが大きく作用していると推測される。

そして清の時代に入り、康熙三十七年(一六九八)に『勅封平天仙姑宝卷』が張掖で編纂・出版された。これは現存最古の仙姑についての宝卷である。おそらくこれも、前代からの流れを受けての出版であろうと推察される。その目録は先に記したが、巻末の刊記には、この宝卷に携わつた人物名が列挙されている。

康熙參拾柒年伍月吉旦 板橋仙姑廟住持經守卷板

太子少保振武將軍孫 施刊

吏部候銓州同知金城謝塵編輯

將軍府掾書張掖陳清書寫

涼州羅友義 王璋

刻字

福建頗順貴 甘州韓文

出版者の孫思克は、康熙年間に河西方面で活躍した「河西四将」と総称される漢人將軍の一人で、対ガルダン戦においても大いに武功を立てた人物である。彼は、この宝巻を出版したほか、張掖において万寿寺（現在も市街中心部に建つ木塔で著名）・武廟・太白廟などを大規模に修築し、さらに武威においても清心寺の塔を重修するなど、河西各地の寺院や廟宇の修築に力を注いだ。謝塵以下の人物については不詳ながら、車錫倫氏は謝塵について、無為教の流れを汲む「皇虚道」なる教派に属する人物であろうと推測しておられる（「車錫倫一九九七」）。

かくして仙姑説話はテキストとして定着していき、黒河中流域における土着の民間信仰であった仙姑信仰は、官の手によって、その存在を公認されることとなったのである。

## 5. 仙姑信仰の広がり ― 清代後半期

明末から清初にかけて、板橋を含む臨沢の黒河右岸は、モンゴル系の遊牧勢力の支配下に置かれていた。板橋の仙姑廟の建築もこの時期に失われたが、康熙年間の初めごろにはここに把総署が置かれ、『勅封平天仙姑宝巻』が刊行された頃（一七世紀末）には再建されたと推測される。そして一八世紀に入ると、仙姑信仰の総本山である板橋のみならず、黒河中流域の各地に、仙姑を祀る廟や末社が設けられた（そのほとんどは現存していない）。

まず黒河本流に沿って見ていくと、張掖では城内中央の鎮遠樓（鐘樓）の西に仙姑樓が設置された（年次不明）<sup>41</sup>。臨沢を挟んで西に位置する高台には、まず康熙五〇年（一七一二）に県城の西北半里の地点に仙姑廟が置かれ、城南四〇里にある梧桐泉にも建設された（年次不明）<sup>42</sup>。高台から黒河本流沿いに下った天城（鎮夷）には、鎮夷城の南門外にある香山に（年次不明）<sup>43</sup>、合黎山を越えてさらに下流に位置する鼎新では、同治五年（一八六六）、知事水利屯田事の虞文瀾によって城外五里の地点に、それぞれ建設された<sup>44</sup>。

咸豊八年（一八五八）に毛日鼎丞として赴任した虞文瀾は、地元で難航していた仙姑廟建設の顛末と、自らの果たした役割について書き記し、『仙姑靈異記』と題して、それを石碑に刻んで建立した（実物は現存せず）。その内容は、廟の建設に対する責任の所在と資金運用のありかたを巡る、地元社会の内部における対立を、虞文瀾がいかに苦心して調整し、廟の完成にまでこぎつけたか、という点に主眼が置かれ、仙姑の靈威そのものは、ストーリーを潤色するための一要素にすぎなくなっている。当時の黒河中流域に暮らす人々にとって、仙姑の存在が、ごく身近でありふれたものになっていたことを物語る一例といえよう。その文面は、『鼎新県志稿』（光緒年間成立、一九四六年手鈔本）「碑碣」および『新編鼎新県志』（一九四五年手鈔本）巻七「金石」に収められているが、些か長文にわたるため、録文は註を参考にされた<sup>45</sup>。

黒河支流の北大河沿いにある酒泉では、肅州城の西北一里の地点に仙姑廟が建設され（年次不明）、雍正元年（一七二二）、肅州通判の毛鳳儀によって、肅州城の北門外半里の地点にも建立されている<sup>46</sup>。そして、その下流の金塔では、県城の東北五里の地点に、光緒四年（一八七八）に仙姑廟が建てられた<sup>47</sup>。

また一九世紀にかけて、嘉峪関外にも仙姑廟が建設されている。玉門では、靖逆城の南門外五里の地点に建立され（年次不明）<sup>48</sup>、天山東部に位置するハミ北方のバルクルでは、嘉慶五年（一八〇〇）、張掖からの「客民」によって

やはり仙姑廟が建立されており（別名「甘州廟」、現在も「龍鳳壁」・「日光楼」・「月光楼」の遺構が残るとい<sup>54</sup>）。これらはいずれも、黒河中流域から新疆方面に入植した漢人たちによって持ちこまれたものであり、移民たちのコミュニティの中核として機能したものであろう。

そして同治年間に、中国西北を揺るがした回民叛乱が黒河中流域に及んだ時、白彦虎らの率いる回民の軍勢に対し、板橋の住民たちは、多数の犠牲者を出しつつ、故郷と仙姑廟を守ろうと戦った。同治九年（一八七〇）一〇月、回民軍が仙姑廟に駐屯したため、板橋の李天栄らは廟を破壊から守ろうと奮戦して戦死、直後に廟は焼かれ、板橋の人々も多くが殺害されたが、回民軍の側も「仙姑の靈佑」により、その軍勢の半数が火災に巻き込まれて焼死したという。翌年にも、板橋の石蘊彩・郭興元・辛万福らが、焼け落ちた仙姑廟の跡地を守るために、隣接する柳樹堡の住民を率いて回民軍を迎撃し、ここで全滅している<sup>55</sup>。戦乱を契機に、地域コミュニティの中核として、仙姑信仰は再び強められていくこととなったのである。

中華民国時代の回想録によれば、板橋の仙姑廟では、毎年旧暦の四月八日（灌仏会）になると盛大な廟会が催され、地元の臨沢のみならず、黒河中流の全域から、多くの参拝客が進香のために押し寄せたという<sup>56</sup>。当時、仙姑廟をはじめ、黒河中流域の各地にある寺観や廟宇では盛大な廟会が行われており、地方官や地元の有力者からは、風紀を乱さぬよう女性の廟会への参加を禁止すべし、との提言もなされるほどであった<sup>57</sup>。二〇世紀後半には、こうした廟会や日常の祭祀に至るまで、すべての行事が禁じられていたが、現在では新暦の四月八日にお祭りが行われ、日が暮れると、人々は黒河のほとりに行き、色とりどりの灯籠を流すそうである「一周国瑞二〇〇五B」。

なお、民国二〇年（一九四二）に、張掖市花寨郷の戴登科なる人物の手になる『仙姑宝卷』の鈔本が現存している。影印版は公刊されておらず、方步和『河西宝卷真本校注研究』（蘭州大学出版社、一九九二年）第二部分「校注評」に、

簡体字標点本が収められている（詳しくは「方歩和一九九二を参照」。この宝巻は、さきの『勅封平天仙姑宝巻』の節略本であり、目録は左記の通りである。

仙姑修板橋第一品（爐香贊）

仙姑得道升仙第二品（駐雲飛）

仙姑顯骨第三品（浪淘沙）

仙姑設橋渡漢兵第四品（傍妝台・哭五更）

彝人焚廟第五品（清江引）

仙姑二次殃夷人第六品（自羅袍）

仙姑三次殃夷人第七品（耍孩兒）

夷人修廟第七品（一枝梅）

仙姑救周秀才第八品（鎖南枝）

仙姑娘娘將一逆一媳婦變狗第九品（掛金鎖）

仙姑救王志仁第十品（畫眉序）

仙姑救單氏母子第十一品（駐馬聽・哭五更）

『勅封平天仙姑宝巻』と比較すると、この『仙姑宝巻』の文量はおよそ半分になっており、巻頭の頌をはじめ、前半部分の仙姑が驪山老母からの試練を受ける場面が大幅に省略されている。一方で、仙姑が地元の人々のために



【写真3】仙姑像

板橋香古寺の仙姑殿にて筆者撮影（2006年）

橋を架けようと尽力して落命する件と、前漢の軍勢を救い、三度にわたって匈奴を懲らしめ、ついには服属させる件については、しっかりと残されている。また、後段の靈驗譚についても同様で、この『仙姑宝巻』が鈔写された当時の聴衆にとって、自分たちにとって身近なエピソードが好まれていたことを物語る。なお、巻末の「近代」、すなわち明末の事績を記した部分も省略されているが、当時の聴衆にとっては馴染みの薄い、遠い過去の「史実」に過ぎないために、不要と判断されたのであろう。ここにはおそらく、回民叛乱後の大幅な人の移動と、それに伴う社会の変化も反映されているように思われる。

6. むすびにかえて

井黒氏は、これまで紹介したものと少し異なる、次のような仙姑説話を紹介しておられる。合黎山で修行を積んだ仙姑は医療にも通じており、人々の病氣治療にも力を尽くした。冬から春にかけて、黒河の水を飲んだ家畜が病氣にかかると、匈奴の人々は名医の誉れ高い仙姑に治療を求め、牧民たちからの尊崇を集めたという「井黒忍二〇〇七」。実際、板橋の仙姑廟には、かつては内蒙古アラシヤン右旗など、「口外の夷王」たちから寄進された匾額が多数あったとい<sup>55</sup>い、金塔の東壩頭分仙姑廟は、創建年次は不明ながら、「夷人」が建立したものと伝えられる。また、四月八日の廟会への参拝者の中には、肅南やアラシヤンで遊牧生活を送る人々も含まれていたそうである「一周国瑞二〇〇五B」。

現在の聞き取り調査では、少なくとも黒河流域各地に暮らすモンゴル系の人々の間では、仙姑に関する説話や信仰は全く伝えられていないということであった<sup>56</sup>。しかしながら、井黒氏が述べておられるように、さきの説話や「夷人」と仙姑との関係を示す記述からは、農耕と遊牧という生業形態や、エスニシテイの違いを越えて、黒河流域に暮らす全ての人々に恵みをもたらす仙姑の姿が浮かび上がってくるように思われる【写真3】<sup>57</sup>。今後も引き続き、仙姑信仰に関する史料調査と現地調査とを継続して行い、その歴史的経過のみならず、現在黒河流域に暮らす人々の仙姑に対する意識についても探求していきたい。

また、一七世紀までは、臨沢の板橋を中心とするごく狭い範囲において信仰を集めていたにすぎない、ローカルな神格であった仙姑が、一八世紀前後を境として、何故かくも広範囲にその信仰圏を拡大するに至ったのか、という点について、今回は十分に考察を加えることができなかった。この時期には、清朝による河西統治の安定に伴い、内地に準じた郡県制への移行、新規屯田・水路網の大規模開発、広域的な水資源管理体制の整備、などが相次いで実施され、内地から大量の漢人移民が流入することによって、大きな社会変動が起こっていた「井上二〇〇七A」。



明末以来、徐々に官の側によつて保護を加えられ始めていた仙姑信仰が、一八世紀に至り、漢人社会のみならず非漢人社会にまでも広められたのは、官民双方の積極的協力があつたことは確かである。清代において、仙姑廟や龍王廟は、水管理組織を中核とする地域コミュニティの祭祀の場として機能すると同時に、州県から派遣された官吏が駐札して、季節ごとの水配分を監督・実施するための拠点でもあつた「井上二〇一一」。今後は、孫思克による『勅封平天仙姑宝卷』刊行の経緯を明らかにし、それを手掛かりとして、清朝の河西統治政策の中に仙姑信仰を位置づけることによつて、前述の問題点について説明していきたい。

## 文献目録

### 【日文】

- 井黒忍二〇〇七・『石刻資料でたどる黒河中流域の古跡―黒河にまつわる信仰・祭祀のあとを尋ねて』、『アジア遊学』九九「特集 地球環境を黒河に探る」、東京・勉誠出版
- 井黒忍二〇一二・『水利碑研究序説』、『早稲田大学高等研究所紀要』第四号
- 井上充幸二〇〇七A・『清朝雍正年間における黒河の断流と黒河均水制度について』、井上充幸・森谷一樹・加藤雄三編『オアシス地域史論叢―黒河流域二〇〇〇年の点描―』、京都・松香堂
- 井上充幸二〇〇七B・『カレーズもどき』探訪記』、『アジア遊学』九九「特集 地球環境を黒河に探る」、東京・勉誠出版
- 井上充幸二〇一一・『明清時代の黒河中流域における水利用について』、『東アジア文化交渉研究』第四号
- 佐藤貴保ほか二〇〇七・『佐藤貴保・赤木崇敏・坂尻彰宏・呉正科「漢蔵合璧西夏「黒水橋碑」再考」』、『内陸アジア言語の研究』

XXII

沈衛榮二〇〇七：「宗教的信仰と環境的必然性——一—四世紀の中央ユーラシア・カラホト地域におけるチベット密教の  
実践——」井上充幸・森谷一樹・加藤雄三編『オアシス地域史論叢——黑河流域二〇〇〇年の点描——』、京都・松香堂

## 【中文】

車錫倫一九九七：「清虛皇道『勅封平天仙姑宝卷』」、車錫倫『中国宝卷研究論集』、台北・学海出版社  
方步和一九九二：「張掖仙姑的歷史意義」、方步和『河西宝卷真本校注研究』、蘭州・蘭州大学出版社

王芑一九八四：「西夏黒水橋碑考補」、白浜編『西夏史論文集』、銀川・寧夏人民出版社

周国瑞二〇〇五A：「昔日仙姑廟会」

[http://www.gs.xinhua.org/dtpd/2005-12/19/content\\_6632977.htm](http://www.gs.xinhua.org/dtpd/2005-12/19/content_6632977.htm)

周国瑞二〇〇五B：「仙姑廟会追記」

[http://www.gs.xinhua.org/dtpd/2005-12/19/content\\_6632975.htm](http://www.gs.xinhua.org/dtpd/2005-12/19/content_6632975.htm)

## 【注】

① オアシスプロジェクトの概要については、左記のURLを参照。

<http://www.chiky-u.ac.jp/rhnh/project2009former/4CR-1.html>。

② この地点には、上流から流されてきた土砂が多く堆積し、「流沙河」とも呼ばれていた。川底が浅いため、板橋より少し下流の平川では、平底の川船により車両・人畜を渡していたが、重量物を搭載することはできなかつたという（『臨澤縣採訪録』（二九二九年編纂）「交通類」河運）。地方志によれば、乾隆二五年（一七六〇）に、通判の高沆が、川船を連結して板をその上に渡し、「平川橋」

という浮き橋を作ったが、後にこの橋は失われ、渡し船に切り替えられたという（乾隆『甘州府志』卷五「宮建」関梁「撫彝庁」。この渡し船は、同治年間に回民叛乱を平定した左宗棠の幕僚、黄建庭なる人物が設けたものであった（『創修臨沢県志』卷二二「耆旧志」流寓）。季節的な水量の変化が激しい黒河にあって、橋を架けることは極めて困難であった。現在、板橋と対岸の鴨暖との間には、コンクリート橋が架けられ、二〇〇六年の調査時にはそこを往復して渡河した。

③ 『勅封平天仙姑宝卷』の影印は、『民間宝卷』第一三冊（中国宗教歴史文献集成）一一三、黄山書社、二〇〇五年）所収。現物は、北京大学図書館に所蔵されている「車錫倫一九九七」。なお、『金張掖民間宝卷』（甘肅文化出版社、二〇〇七年）第一巻には、この簡体字標点本が収められている。

④ なお、仙姑のお膝元である臨沢の地方志（『臨沢県採訪録』・『創修臨沢県志』）の、仙姑に関連する記述は、いずれも『勅封平天仙姑宝卷』に基づいて記されている。

⑤ 乾祐七年を一一七六年とするのが正しく、『東方年表』の記載が誤りである、とする根拠については、「佐藤貴保ほか二〇〇七」一二頁を参照。また、後述の乾祐二年を一一七二年としたのも同論文に基づく。

⑥ 王廷贊撰《重建黒河龍王廟碑記》（乾隆『甘州府志』卷二四「芸文」中）、石碑は現存せず。また馮理「甘民衣食源記」（乾隆『甘州府志』卷一四「芸文」中）も参照。なお、光緒八年（一八八二）にも、御製の《仁敷鯉得》の匾額を下賜されている（『新修張掖県志』（二九四〇年代成立）地理志「古迹」）。

⑦ この調査を行った加藤雄三氏からご提供いただいたデータによる。

⑧ 袁州佐撰《重修中龍王廟合祀碑記》（乾隆『甘州府志』卷一四「芸文」中）、石碑は現存せず。

⑨ 順治「重修甘鎮志」（順治一四年（一六五七）序刊本）卷一「祠祀」龍王廟、乾隆『甘州府志』卷五「宮建」壇廟寺觀附「甘州府」張掖附郭を参照。

- ⑩ 二〇一〇年に大仏寺を訪問した際には、『黒水橋碑』は陳列されていなかった。蘭州の甘肅省博物館に移された可能性があるが、詳細は不明である。
- ⑪ 楊翥は肅州出身の人で、弘治年間に分守肅州右參將となり活躍、「北虜」との戦闘で戦死し、忠勇祠に祀られた（『肅鎮華夷志』（順治一四年（一六五七）高彌高重刊本）卷三「官籍」肅州衛（敦煌附）明、同書卷四「人材」明、『重修肅州新志』（乾隆二年（一七三七）刊）肅州拾貳冊「人物」明「忠節」）。
- ⑫ 乾隆『甘州府志』卷二「世紀」下・孝宗弘治元年・一一年・一八年各条。
- ⑬ 乾隆『甘州府志』卷二「世紀」下・世宗嘉靖三六年・三七年各条。
- ⑭ 乾隆『甘州府志』卷二「世紀」下・（万曆）一八年条。
- ⑮ 乾隆『甘州府志』卷二「世紀」下・（万曆）一八年条、同書卷一六「雜纂」。詳しくは李文君『明代西海蒙古史研究』（中央民族大学出版社、二〇〇八年）第三章を参照。
- ⑯ 乾隆『甘州府志』卷九「官師」上「総兵官」。
- ⑰ 屠隆「明故正義大夫兵部右侍郎兼都察院右僉都御史侯公墓誌銘」（『白榆集』卷一八）、『明文海』卷七二「碑」六（《少司馬兼御史中丞掖川侯公紀功碑》（何洛文））。
- ⑱ 『明神宗実録』卷二八・万曆二年八月癸卯条。
- ⑲ 『明神宗実録』卷三三・万曆二年閏一二月己丑条、乾隆『甘州府志』卷二「世紀」下・神宗万曆二年条。同時期にはオールドスにも同名のビンドウがいたが、張居正は王崇古からの情報に基づき、「西海（青海）に寄居しているのはアルタンの息子のビンドウであり、オールドスのそれではない」と、事態を正確に把握していた（張居正『新刻張太岳先生文集』卷二六「答甘肅巡撫侯掖川」）。この他にも、張居正は、アルタンとの間で取り交わした和議の実行については、自分が全責任を負うので、安心して甘肅の統治

に全力を尽くすよう、侯東萊に対して幾度も書簡を送っている（『新刻張太岳先生文集』卷二九「答甘肅巡撫侯掖川」）。甘肅方面の統治についても、やはり実質的に張居正が取り仕切っていたと見てよいであろう。

- ⑳ 『明神宗実録』卷三三・万曆二年閏一二月己丑条。
- ㉑ 『新刻張太岳先生文集』卷一七「答甘肅巡撫侯掖川」。
- ㉒ 馮時可「俺答後志」（『明経世文編』卷四三四）。
- ㉓ 『明神宗実録』卷三七・万曆三年四月辛巳条、乾隆『甘州府志』卷二「世紀」下・神宗万曆二年条。甘州城の城壁を改修した際、城壁の中に塗りこめられていた多数の小型の棺桶が発掘される、という怪異譚が伝えられている（乾隆『甘州府志』卷一六「雜纂」）。
- ㉔ 『明神宗実録』卷四九・万曆四年四月戊子条。扁都口とその北の山裾に広がる大草灘は、月氏・匈奴以来の河西最良の牧地である。青海の遊牧勢力は、絶えずここへ進出する機会をうかがい続け、さらにここを拠点として、オルドス・モンゴル高原の諸勢力との連携を図った。河西回廊を押さえる中華王朝にとって、扁都口の防衛は極めて重要な意味を持っていたのである。扁都口の位置とその重要性については、井上充幸「明清時代の黒河上流域における山林の開発と環境への影響」（『東アジア文化交渉研究』第三号、二〇一〇年）を参照。
- ㉕ 以上、詳しくは李文君「明代西海蒙古史研究」第三章を参照。これに関連して、明の側も、チベット仏教教団を介してモンゴル諸王侯を統制しようと試みている。侯東萊は、「烏思藏の法王の子」で活仏のソナムⅡギェルツェン（鎖南堅参、bSod nams rgyal mshan）の権威を利用したとされる（「少司馬兼御史中丞掖川侯公紀功碑」）が、これも張居正からの指示を受けてのものであった（『新刻張太岳先生文集』卷三〇「答甘肅巡撫侯掖川」、同書卷三一「答甘肅巡撫侯掖川」）。
- ㉖ 張志純・施愛民主編『張掖文物古迹薈萃』（張掖地区地方史学会、一九九八年）第二章「名勝古迹」第四節「石刻」一二七頁を参照。
- ㉗ 王經は守備平川等堡地方都指揮僉事の肩書を持つ武官で、万曆一〇年（一五八二）撰『重修玉皇閣碑記』にもその名を連ねる（『臨

「沢泉採訪録」金石類《平川観音堂碑記》。

⑳ 「陳」は陳鏡、綏徳衛の人で、万曆二年（一五七四）から同七年（一五七九）にかけて甘州左副総兵として活躍（『明神宗実録』卷二四・万曆二年四月壬戌条、同卷八三・万曆七年正月乙丑条）、都督僉事に至る（『重刊甘鎮志』「官師志」名宦「分巡西寧道」）。

㉑ 「馬」はおそらく馬邦良、富陽の人（乾隆『甘州府志』卷九「官師」上「明」張掖県附行都司「行太僕寺卿」）。

㉒ 「殷」は殷仁、順天の懷柔の人で、嘉靖三三年（一五五三）の進士、万曆三年（一五七五）に着任（乾隆『甘州府志』卷九「官師」上「明」張掖県附行都司「分巡西寧道」駐札甘州）、翌年には行太僕寺卿となり馬政を担当、太僕寺卿兼陝西僉事に昇進して致仕（『明神宗実録』卷七七・万曆六年七月戊辰条、同卷七八・万曆六年八月乙酉条）。

㉓ 「楊」は楊繼芳、鎮番の人で、万曆四年（一五七六）に着任（『重刊甘鎮志』「官師志」名宦「甘肅巡撫標下游擊將軍」）。

㉔ 『明英宗実録』卷一四八・正統一一年一二月甲辰条には、甘州などの流行病を鎮めるために、太常寺丞の李宗周が派遣され、甘肅境内の山川の神を祭ったとあるが、この中に仙姑が含まれていたかは不明である。なお、乾隆『甘州府志』・『新修張掖県志』所収の仙姑関連の記事は、この『重修仙姑廟記』の文面を踏まえたものである。

㉕ 乾隆『甘州府志』卷五「宮建」壇廟寺觀附「撫彝庁」仙姑廟。

㉖ 兪益謨校注「孫思克行述」（『清史資料』第二輯、中華書局、一九八一年）。

㉗ 孫思克撰《重修万寿寺碑記》・《重修武廟碑記》・《創建太白廟碑序》（乾隆『甘州府志』卷一四「藝文」中）、石碑はいずれも現存せず。

㉘ 《孫思克重修清心寺塔記》（『武威金石録』（蘭州大学出版社、二〇〇一年）第一部分「金石録」清）、石碑は現存せず。

㉙ 孫思克が、自ら水神の祭祀を執り行った様子については、以下のように述べられている。「又春秋躬祀龍神、不憚跋涉迢迢、爲民間祈穀。歲荒早、爲文親禱、輒痛哭流涕、引事以自責、至誠格天、或甘雨立沛以蘇困稿、或河水立發以資灌溉、連祀以來、屢祈屢應、而河西軍民、靡不歡聲動地、稱公爲一路福星云。」（『孫思克行述』）。

- ③⑧ 梁份『秦辺紀略』（一七世紀後期成立）卷三「甘州衛」甘州北辺「仙姑廟」。
- ③⑨ 『新修張掖県志』地理志「古迹」仙姑廟旧址。
- ④① なお臨沢県の東関には、明の時代から仙姑廟が置かれていたという（『創修臨沢県志』卷二「建置志」寺観「仙姑廟」。
- ④② 本山の板橋仙姑廟には、康熙年間の鑄造にかかる高さ五尺・幅二尺の大きな香炉が置かれ、臨沢東関の仙姑廟には、乾隆二七年（一七六二）鑄造の鐘があったことが記録されている（『臨沢県採訪録』「金石類」金）。板橋仙姑廟には、漢代の三足鼎があったが、
- ④③ 民国一四年（一九二五）、何者かによつて盗まれたという（『創修臨沢県志』卷一三「金石志」金器）。
- ④④ 乾隆『甘州府志』卷五「宮建」壇廟寺觀附「甘州府」張掖附郭。
- ④⑤ 『重修肅州新志』（乾隆二年（一七三七年）序刊本）高台參冊「祠廟」仙姑廟。
- ④⑥ 『新編高台県志』（一九二一年刊）卷三「祀事」。
- ④⑦ 『新編高台県志』卷二「祀事」。
- ④⑧ 『鼎新県志稿』建置志「祠廟」仙姑廟。
- ④⑨ 『鼎新県志稿』職官志「官師表」一。
- ④⑩ 『仙姑廟靈異記』碑文
- 竊稽、漢代霍去病將軍西征班師時、路遇仙姑顯聖化橋、渡兵過河。及平時木造板橋、濟衆耕種沙田。神靈赫赫、載在本傳甚詳。嗣經奉玉帝敕封、爲平天仙姑、由來久矣。
- 惟毛目離板橋廟、路甚遙遠、衆百姓上香不便。是以戶民衆議、在毛目本處東東石一崗、創造新廟一座。日後便於敬神還願。迺於咸豐八年（一八五八）、擇地興工建立廟基前、經會主單永祿・劉珍等持縁到署、募化木料、瀾玩許書御助木六十根、以應需用。迨至咸豐十年（一八六〇）春三月十八日聖誕紀念、一會「首單永祿執具票帖、請瀾到東石崗廟上、但見規模草創、神像未經采畫、

地磚門窗均未齊備。深責會首人等、在三年戶上、衆姓已共捐過佈施錢一百九十七串文、遲迺至久、迄無成功、該會首甚屬怠玩。

瀾初意欲、將原廟上樑棟木料撤下、移此廟於毛目營兒街上城隍廟西首建造、由署捐廉補修、不累戶民、所有工程、一切仍復、易就經理。且使此廟戶民上香完願、地方較爲近便、即廟宇亦易於監官。經久已擇於某日動工、移折廟屋。當有衆姓一懇一求勿移此廟、瀾決意不許、定要移廟。

豈料、木匠吳均等、是日晚間、工畢回家、因黑夜難行。恍見有紅燈一枚、由廟之前隱隱移至左邊土地廟過去。木匠等隨燈先前去、及至土地廟門首、並不見有燈彩。其爲神之顯靈已可見矣。是夜瀾在署內、尚不知有此事。次日早間、復親率匠人等移當時、毛目衆姓無可奈何。至不得已、衆歸咎於單永祿、因伊請官上香移廟之舉。衆人遂鬩然、將單宅圍繞、爭嚷不休。其時單永祿情急、偕同妻及子單珍、捨命叩求瀾免移此廟、以息衆怒。如不允准、立死廟前。言猶未畢、單永祿及單珍、自將石頭土塊亂撞、二人幾斃。瀾念伊父子等愚誠可嘉、准其免移東石崗廟宇。單姓始慰、衆姓亦歡然而散。瀾復諄諄吩咐單永祿等、嗣復速行剋日計資助工、即將廟貌修齊、不可怠緩。一切花費、並不可再聚衆、硬向外面地方濫寫佈施、有累戶民等情。當經該會首等、均遵約束辦理。瀾立刻將蓋就、並立緣簿一本、查註詳明、交完會首、經管辦理。其當經一受一傷之單永祿、單珍等、前幾危殆、默蒙神祐、甫經三日、廟基安好如初。

瀾復詳問單永祿、「何以爾等衆姓堅持要在東石崗建廟、不願移徙。」據單永祿聲稱、「初欲移廟折木之時、單永祿·單珍等至東石崗地方、若見有神化形、親履真地、指畫界址、踪跡分明、忽然不見其人。單珍方慮此處無水無土、難以建造。詎料、不終朝而井泉出土泥生、真有神妙不可例者矣。故衆姓願建廟東石崗、而不願移徙之實情也。」瀾始知改悔前此移廟之舉、氣暴性急、妄力違衆議、過出鹵莽、深信仙姑之靈異。其重單永祿之誠篤、及單珍之奇敬、與毛目衆姓之樂善好施、而仍不敢犯上也。特援筆爲之詳記眞事、以彰瀾過、而表仙姑之靈感云爾。

時咸豐五年（正しくは同治五年・一八六六）三月朔、知事水利屯田事浙江杭州錢塘縣虞文瀾撰並書。



- ④⑧ 『重修肅州新志』 肅州伍冊「祠廟」仙姑廟。二〇年あまりにわたって肅州で活躍した毛鳳儀は、後継ぎとなる男子の誕生を祈念して仙姑廟を建立したという。雍正七年（一七二九）、在任中に病没した毛鳳儀を祀るため、地元の有志たちは祠廟と祭田を設けたが、そこには毛鳳儀の後裔たちが代々居住したという（同書同卷「毛公祠」）。『勅封平天仙姑宝卷』「仙姑近代顯靈分」には、やはり仙姑に嗣子の誕生を祈念した文武官に関する説話が記されており、明末以降の地方官が個人的に信心していた様子が伺える。
- ④⑨ 『創修金塔県志』（一九四三年手鈔本）卷三「建設」廟宇「仙姑廟」。金塔の仙姑廟では、旧曆の五月二五日に四日間わたって廟会が催されていたという。
- ⑤⑩ 『重修肅州新志』 靖逆全冊「公署祠宇壇壝」僊姑廟。
- ⑤⑪ 『哈密文物志』（新疆人民出版社、一九九三年）第三章「古代建築」第一節「寺觀・堂館」二「廟觀」仙姑廟。ここも旧曆の五月二五日に、三日間にわたって廟会が開催された。
- ⑤⑫ 以上、『創修臨沢県志』卷二「耆旧志」忠節。
- ⑤⑬ 『創修臨沢県志』卷三「民族志」漢族「風俗習慣」。
- ⑤⑭ 『肅州新志稿』（光緒間手鈔本）文藝「六禁」、申大振「戒婦女游廟」（『臨沢県採訪録』「藝文類」詩詞）
- ⑤⑮ 乾隆『甘州府志』卷一六「雜纂」。
- ⑤⑯ 『創修金塔県志』卷三「建設」廟宇「東壩頭分仙姑廟」。
- ⑤⑰ 熊本大学のシンジルト氏からのご教示による。
- ⑤⑱ なお、仙姑廟内には観音菩薩と仙姑菩薩の二尊の銅像が安置されていたという（『創修臨沢県志』卷二三「金石志」造像）が、これが【写真3】の像と同じものであるか否かは不明。

〔追記〕

本稿は、二〇二一年八月二十八日に開催された、二〇二一年度立命館東洋史学会大会における発表原稿に基づくものです。その席上、筆者に対し有益なご意見・ご質問の数々を賜りました皆様に対し、心よりお礼申し上げます。

（本学文学部准教授）